

---

# 直死の魔眼・ストラトス

赤ザコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

直死の魔眼・ストラトス

### 【Nコード】

N2969BA

### 【作者名】

赤ザコ

### 【あらすじ】

道で石につまずいて死んだと思ったら転生？よくある展開で貰った能力は『直死の魔眼』と驚異的な身体能力。よし、ランダムで選ばれる転生先はどこだ！——ってISだ！？おい！能力が意味ねえぞ！！どうすりゃいいんだああああああ！！※これは作者の妄想を組み立てた作品です。

**ああ、これを不幸といわずなんという（前書き）**

※この作品は作者の妄想、ご都合主義の集まりです。  
それをご承知の上、お読みください      b y 赤ザコ

ああ、これを不幸といわずなんという

ここはどこだ？

俺はどうしてこうなった？

目の前には装置のような、最新機器のようなもの。

周囲にはさっきまでいなかったはずの、人、人、人。

俺は目の前の装置を動かしてしまったことに後悔しつつ、目を細める。

ふむ、とりあえず自己紹介をしておきたいと思う。

俺は転生者……。

多分そうだろう。

ってか、坂道で石につまずいて、そのまま電柱に激突、そして最後にトラックでバーン！

神様よ、ミスるにしてももう少しましな死に方にさせてくれないか？

痛々しい話だが、もう外見が変えられてしまったのもう発言に責任を感じなくなっている。

いや、人は許容量以上の事実を突きつけられると、俗にいう現実逃避というやつにおちいってしまう。

俺のもそれかもしれない。

話が逸れてしまったようだね？

俺の名前は■■■■・・・ではなく、織斑織。

俺をミスって殺しちゃった神様とやらが、転生させてくれた。

中性的な顔な顔立ちに、この世界のスパルタ姉仕込みの引き締まった体。

元の名前？容姿？そんなもの、転生の際にクソったれの神様が抹消なさったよ。

神様め・・・だから化け物の類は嫌いなんだ。

いや、それよりも・・・。

よし、自己紹介に戻ろう。

そんなこんなで転生した俺は、再び神様のミス？それとも故意？のせいで不幸な目に合い、織斑家というか、織斑千冬に引き取ってもらったわけだ。

引き取られた時の年齢が幼稚園生くらいだったので（精神年齢は高校生だが・・・）、早速原作に在るであろう人物たち、というかあのフラグ野郎・・・見てただけでイライラした。

一応、俺も女子受けは悪くなかったが、一夏の義理の弟というのはつらい。

年齢が同じなので双子みたいなものなのだが、それが俺の不安の要素の一つだった。

もし・・・もしだが・・・俺がISを動かせる、なんて意味不明な設定だったらと思うとゾツとする。

話を戻そう。

それで、俺をミスって殺した神様がランダムで世界を選ぶけど能力は選ばせてくれると言った。

そこで俺は空の境界の主人公、両儀式レベルりょうぎしきの身体能力（一般人から見れば化け物）と『直死の魔眼』を頂いた。

容姿も若干式に似ているが、名前まで同じなのは（まあ、式は女のほうの名だからな）アレなので、作中に消滅してしまったほうのシ

キ、つまりは織のほうの名前を貰った。

ちなみに、『直死の魔眼』の性能は本遍と同じ性能のもので、流石にそれは』と繋がっていないから無理がある、と俺が言うと、神様は『起源が虚無である人物を作って、そこに記憶をダークイリュージョンでトレスしたわけだから』などといってやがった。

なんという無茶振り。

流石神！

それでいける・・・のか？

ご都合主義である。

つまりここにいる俺は偽者に近いわけである。

しかし、この眼も困ったものだった。

まず、この眼の特徴としてはモノの死が見えること。

これは問題ではない。

それよりも大変だったのは死を常に知覚しなければならぬので、本気で鬱になりかけたこともしばしば・・・。

こっちには魔眼を抑えるメガネなんてないからなあ。

一応、そんな辛い眼で暮らしていた俺はいつの間にか死んだような魚の目になっていた。

不安だらけだしな。

IS壊したら不味いし、目立つし。

そして、幸い？だったのが、案外平和なこの世界に飛ばされたことで、このまま緩やかに穏やかにのほほんと暮らしていきたい。

だがやはり俺の立ち位置は、それを壊しそうなものだ。

再び話を戻そう。

そんな俺の不安も、『まあISに触れること自体がないからな』と思っていたが違った。

いや、一度訳ありでISの装甲を壊し、修復不可能にさせたことがある。

そのせいか束さん、偉く俺のことお気に召したようだね……。

まあかくいう俺も束さんLOVEなわけだが。

……待った、今のなし。

一夏のやつがIS起動させた直後に、実験とか言って俺を拉致。



男でもISが使えるのか？という再確認のために複数人連れて来られた。

その中にワンサマー（一夏）もいる（というより一夏の検証でもある）わけだが、俺だけ強制だ。

そして今に至るわけなのだが・・・。

「シッキー！これはこれは流石の束さんも感動したよー！！」

「拉致の上に何この展開！！？」

横で何かウサギの耳がついたカチューシャをした女性―篠ノ之束がそう騒ぎながら俺に抱きついてくる。

周囲には人がいるのに、この人は遠慮がない。

何だかんだでこの人が俺を見つけてくれたおかげで、俺は織斑家という居場所を得たのだ。

・・・胸が当たってるし。

や、やわらかいし、・・・大きいな。

「束ちゃん、離れて、頼むから、離れて視線が痛いし、俺も恥ずかしいから」

まんざらでもない自分がいることを自覚する。

「ええー！照れない照れない！束さんは平気だよー？」

「僕は大丈夫じゃない！！」

俺はどこぞの Cocktail のようにクールではいられないらしい。

今の俺のその手の感情表現は、どちらかといえば式に近いようだ。

と、いうより、俺は一人称を僕にしたり俺にしたりしてしまう。

安定しないなあ。

これも、俺が眼を貰ったからか？

「それよりも、これはニュースになるよーシッキー！すぐに IS 学園に行くことになるかも！」

「いや、束ちゃん。それは・・・僕の受験勉強はどうなるの！？せっかく名門の学校に受かったのに！？」

おい、待て。

平和にほのぼのと一夏の波乱万丈な人生を高みの見物でもするつもりなのに！

僕の人生、また死ぬわけにはいかないんだ！

なのに何ソレ。

「ちなみに、この天才束さんの実験、今も全世界で生放送中だぞ☆」

「ええ！？何その嫌なTVデビュー！！僕はどこまでも平凡に慎ましく、最後は家族に看取られていくようなほのぼのした人生を送りたいのに！」

「その台詞も流れてるよー」

「と、いうよりこのイチヤイチャしてる光景も映されてるの！？」

直後、パシヤリという音とフラッシュが雨のように連続で俺に降りかかる。

「記者まで隠れていたの！！！？タバネもん！何か道具出してよ！！！」

「天才束さんに任せなさい。テテテッテテ録音機。さっきまでの会話も全部入ってるから大丈夫だよーどーんとぶちまけちゃう！」

「逆に状況悪化させてる！！！？しかも胸の谷間から出すとかそういうの止めろ！それよりもっといいもの出してよ！」

「じゃあじゃあ、こういうのはどう！？IS学園転入関係の用紙」

「何が何でも僕をISに関わらせるつもりか！！！？」

「ふっふっふ、そういうのは諦めちゃおー！シッキーはもう有名人だよー！」

「プライバシーも糞もない世の中に絶望したあ!!」



などということがあり、ただいま俺は一つの教室の中で、一夏を横に頭を抱え込んでいた。

横の鈍感男をいつ殺してやろうか?と思考を切り替えようとするが、スクイズみたいな惨状はゴメンなので思考を中断する。

出来れば、人を見るのは極力避けたい俺。

だってこの眼は死を視てしまうから。

悩みの種である。

殺人鬼にでもなつてれば、別だろうけど・・・。

「だ、大丈夫か? 織?」

「うわああああああ! 大丈夫なもんかああああ! 俺は人が好きだけどさ! 目立つこと!! 人を見るのが嫌いなんだよ! 昔確かに I S の装甲を完全に破壊したけどさ、この扱いはないだろ!! 高校で親友作りたいなんて思った俺が馬鹿だった! 横にはフラグ建築士! その周囲からは注目の的!」

「そう言えば、俺よりも目立つ報道のされ方だもんな。ところでフラグ? どういうことだ? それ?」

コイツ、本気で殺してやろうかな？

いや、それはまずい。

「どこで人生間違えたらこうなるんだよ!!」

はい、坂道で石につまずいて転んだらこうなりました。

「お、落ち着けて織!」

「よし、落ち着いた」

「早いなおい!」

うん、すぐこの学校を辞めよう。

転入してすぐにそう言い放つと俺は決める。

「いやゝそれにしても、織も同じでよかった」

「ん? どうしたワンサマー」

「いや、もし男が俺一人だったらなくなんて思うと不安で不安でたまらなかったんだよ」

「それに俺の同意を求めるのか? 答えはNOだ馬鹿やろう。お前といて、俺にいいことがあったためしがねえ」

と、そこでメガネ巨乳天然癒し系キャラの山田先生が入ってきた。

コイツも地味にとりやつの毒牙にかかると思うと、残念でない。

「皆さん入学おめでとう！私は副担任の山田真耶ですあ、えーっ・・・」

自己紹介もむなく、生徒の視線は全て一夏に向けられている。

「・・・お前もだぞ、織」

「え？マジ？・・・あっほんとだ。不登校にでもなろうかな？」

「さらっと凄いこというな・・・」

淡々と説明をしていく先生の話を聞き流しつつ、俺は横に居る鈍感クソ野郎と話を続ける。

そんな中、一夏は俺との話に集中しているため、原作どおりの流れに気付けないで居る。

と、ここで一夏の自己紹介タイム到着。

「えーっと織斑一夏君！」

「はいッ!？」

「クックック、お前の自己紹介、この弟は期待しているぞ？」

「というわけだから自己紹介お願いしてもいいかな？」

「え、えーと織斑一夏です・・・」

ここで、原作通りこれ以上どう言おうか迷ってる一夏。

「じゃ、じゃあ弟さんのほうからでもいいかな？」

困っている一夏に助け舟として俺を出撃させる山田先生。

視線が一斉に俺に向けられる。

「はぁー馬鹿な兄貴だ、お前は」

「なッ！？織！」

「さて、織斑織です！特技は特になし！趣味も特になし！ああ、今日で俺この学校を辞めまs」

直後、目の前に見慣れた拳があった。

「馬鹿かお前は」

ギャグ補正があつたためか俺はその攻撃を顔面にまともに喰らい、教室の後のほうの、空白のスペースまで殴り飛ばされる。

「どんがらがっしゃーん！！」

俺の口から出た言葉よりも、現実的には嫌な音が炸裂したわけだが・・・。

「出やがったな。化け物姉k——ッ!？」

起き上がり様にアップアをかわし、猫のような俊敏な動きで迫る出席簿を淡々とよけていく俺。

それを放っている人物こそ、織斑千冬という、この作品上おそろしく素でも強い女である。

昔から、この姉貴はそうだった。

俺の身体能力が化け物みたいなのだから、一夏に放つような攻撃は俺には当てられない。

避ける俺も俺だが、ここまで暴力的なのもいかげんと思うがどうだろうか？

「織斑先生と呼べ」

「フーッハッハッハ！アンタに言われたメニューをずっとこなしてた俺にそんな攻撃きかない！」

「ほう、それは感心したな（イラッ）」

「え？」

一言そう言った千冬の姉貴は掃除用具が入っているロッカーから、モップを一本取り出し、不適な笑みを浮かべる。



おい、不味い。

千冬の姉貴が大きく一步踏み込んだ。

これは不味い！

直後、俺の鼻先をモップが掠めた。

いや、直撃したら怪我するよ。

「ッ」

「なるほど、相変わらずデタラメな動きだ」

「ッ、お前が言うなってやつですよ」

俊敏な動きでモップを避けていく俺と、それに追撃していく千冬の姉貴。

少しスイッチが入りかけているらしい。

このままだと放置されている山田先生が可愛そうだ。

俺も、フルに集中してモップを見る。

先ほどよりもよりはっきりと死が、見える。

モップに走る線。

それを・・・。

「一夏！俺の筆箱から物差しよこせ！」

「あ、ああ！！！」

一夏は横の俺の席から筆箱を出し、さらにそこから物差しを出した。

「織！」

「よっこっせ！」

「ほらよ」

軽い仕草で投げ渡す一夏。

普通ならば、武器を取ろうとする俺を千冬の姉貴は見逃さない。

だが、見逃さないと、撃ち落せないのは違う。

俺がしなやかな動きでそれを左手に受け取った。

「すぐ折れるだけだぞ！」

「だろうな」

見える死。

それをなぞるようにすればいい。

こんなもの、誰も信じないだろうが、それでいいと思った。

振り下ろされるモップ。

今度は俺は避けようとしなかった。

「！」

周囲が息を呑む中、物差しでモップを受け流すように切りつけ……。

「まあ、こんなもんだ」

モップを粉々に粉碎した。

「す、すげえ……」

無言と一夏の驚嘆の声。

「……織斑……後で職員室にこい」

俺はこの時、こっそりしかられる理由を作ってしまったと内心後悔していた。



「ねえねえ、弟くんってさあ、千冬お姉さまから何か仕込まれてたりするの？」

「さっきみたいな動きもやっぱり織斑先生仕込み!？」

「それ以上に彼女が篠ノ之束博士だって本当!？」

休み時間。

さっきのこともあってか俺と一夏の周辺には人がかなり集まっていた。

質問攻めは覚悟していたが、予想以上に束との中を聞いてくるものが多い。

おい、どうしてお前らはそう話を飛躍させて考えるかな？

「人気者だなあ、織は」

「死ね! 死に絶えろ! 英語でいうとS H I・N Eだ!」

「それローマ字なのか? しかも英語だと輝くって意味だし・・・輝いてどうすんだよ」

「輝き死ねってことだよばーか!」

悪態をつく俺に呆れたようにため息をつく一夏。

やはりコイツは鈍感キャラなんだよな、と思ってしまふ。

「ねえねえ、結局のところどうなのー!？」

「きかせてよー? あ、他に彼女いるとか?」

「ああーもう、俺は人付き合いが苦手な奴なんだよ！」

「そ、それ、ここで言うかよ!？」

「黙れ女ったらし！」

もう無理！

人が多いこの密集地帯に居たくない。

実際は人付き合いが苦手なんじゃなくて、人の死を見ることが嫌なんだ。

とくに大勢のものをを見ると、今でも結構くるものがある。

「あとは任せたぞ。一夏」

「ええ？ ああ。わかった」

俺は一夏に絡んできたクラスメイトを押し付け、教室を後にして屋上へ向かった。

途中、俺の姿を見た生徒が後からつけてくるのがわかったが、無視して屋上にたどり着いた。

『ねえねえ、シッキーから電話してくるとはどーいう風の吹き回しなのかなー?』

「とりあえず、人と会わずに人と会う方法ないか？人ごみは苦手なんだ」

『それは天才束さんと結婚したいというラブコールと受け取ってもいいんだねー？よーし、今から迎えに行っちゃうぞー』

「ふむ、その手の冗談でからかうのはもう止めてくれ。俺はどこぞの鈍感馬鹿と違って純粋で純情でああ、もう。一回説明しただろ？俺は異常だって」

『眼だけじゃなくてね』

「ああ、眼についての詳細は言っていないけど、これのせいで俺は・・  
って眼をつぶしたところで変わらないんだけどな」

『興味深いねー、ホント。何せISを刃物一つで完全に壊すことが出来ちゃうから、あの時は流石の束さんもビックリたまげちゃった』

「あれは偶然だよ偶然」

―束は俺が鬱になりかけていた頃に、いち早くそれに気づき、相談に乗ってくれたことがあり、それ以来この眼のことをほんの少し束に教え、秘密を共有しているのだ。

故に、俺に適した専用機とかをこっそり作ってくれたらしいのだが、少し心配だ。

すでにさっきの千冬の姉貴との騒動のせいで、俺の化け物クラスの身体能力はクラスメイトにばれてしまった。

いつそ篠ノ之家に貰われても良かったんだがな。

それはそれで静かな暮らしは出来ないわけだし……。

ってさつきから電話している俺を皆が見てる!?

「だ、だれと話しているんだろ? (ヒソヒソ)」

「家族か恋人か博士か (ヒソヒソ)」

「き、聞いてみる? (ヒソヒソ)」

ふむ、相手まではわかっていないらしい。

『なるほど、屋上にいるけど、それでも女の子がこっちを見ているんだね? 風向きからしてこっちの声は聞こえていないみたい』

「ど、どうやって理解したんだ? 明らかに聞こえてないだろ?」

『え? だってそりゃシッキーの服に盗さ……ではなく天才の』

「ほうほう、小型の割には高性能なやつだな。おそろしいほど小型だな。でも白い制服に黒いカメラはないだろ」

服を探してみると、黒くて超小型のカメラを見つけた。

コイツで俺の周囲を観察していたのだろう。

『……』

「・・・」

いや、だんまりってどうよ？

「束ちゃーん？それは肯定なのかなー？」

しばしの沈黙、そしてその後何事もなかったような明るい声が聞こえた。

『つてなわけじゃあねー！』

そして唐突に切られる電話。

「・・・」

うわ、ひでえ。

強引に切られた電話を見ながら、ため息をつく。

「はぁ・・・」

結構普通に装っているが、なんだかんだで俺はこの眼に振り回されまくりである。

しかし、それもはやこの人のおかげか慣れてきた・・・のか？

「んー後はそうだな、俺の専用機・・・がくればいいかな」

俺の眩きは誰にも聞こえない。



少し風に吹かれていると・・・

俺は向こうのほうから篠ノ之箒と一夏がきたことに今気付いた。

原作通りのイチャイチャイベントか・・・モテ男め。

ニヤリと笑い、二人に俺は近づいていく。

「久しぶりだなあ、お二方そろってるのは・・・デートですか？」

「ツツ~~~~~」

「なッおい、織！」

ヒュン、という音とともに竹刀が俺に向かって振り下ろされた。

「おっと、危ない危ない」

箒の攻撃をかわした俺はすばしっこい動きで一夏の横に降り立つ。

おいおい！！どこから出した？その竹刀。

「おいおい、ツンデレにしては古典的過ぎるぞ、それ」

「つッ！！？わわ、わ私は！！違ッ！！」

顔を真っ赤にされてそう言われましても・・・。

「フウーッハッハッハ！！一夏！お前も笑え！フウーッハッハッハ

「！」

結構な速さだが、俺はそれを淡々とかわしつつ一夏にそう言う。

しかし一夏はその光景を見て冷や汗を流しながら叫ぶ。

「俺にはそんな勇気ないぞ！織！！」

「何をしている一夏！こっちを手伝え！」

「おい、箒！それは無茶な・・・」

「さっさと手伝え！（笑え！）」

「ああー！もう！六年ぶりなのに二人とも変わらなさ過ぎるだろ！！！」

頭をおさえ、叫ぶ一夏だがその叫びは箒には届かない。

「くッ！避けるな！！」

「ハーツハツハツハ！俺は天空に舞う羽！」

世紀末でしか使えないような台詞を吐きながら、俺は屋上の柵までジャンプし、その上に降り立つ。

うん、やはりからかうのは楽しい。

しかも向こうの攻撃もすべてうけきれるとなるとな。

「まあ、青春したまえ♪未来の妹よ、そして未来の姉よ♪」

「きっさっまああああああ!!」

顔を真っ赤にして向かってくる掃除用具さん。

人の恋路を邪魔するものは馬に蹴られて死ねっていうしなあ・・・。  
とりあえず俺は邪魔者らしいので消えることにする。

でも廊下は野次馬だらけだって？

じゃあ、別の道を使うか・・・。

「see you again!」

「なッ!!!?!」

「織!!!?!」

背中から落ちるように屋上から落下していった俺に、二人は驚く。

俺は落ちる瞬間に柵を蹴っていたので、クルクルと空中で回転した後、学校にある電子蛍光版のほうに体をまるめながら足をつく。

しかし、それも地面に対して垂直なものなので、落ちる前に再びそれを蹴る。

そうして、心配した二人の予想を上回り、近くにあった木のちよう

どいい太さの複数の枝につかまった。

俺の勢いに枝がしなり、ちょうど足に地面がつくくらいのところでスピードがなくなる。

それと同時にトン、と地面に降り立った俺は自分の身体能力の異常さを再確認する。

「まあいいや（笑）」

こちらをポカンとした顔で見ている二人を置いて、俺は再び校舎の中に入る。

**あの金髪も結局はデレるんだよね？（前書き）**

アルバ「まさかここまで伸びるとは思わなかったぞ!？」

**あの金髪も結局はデレるんだよね？**

どうも、織斑織です。

今、俺はISに関しての授業を受けているのだが、横にいる我が兄、織斑一夏と同じように頭の中でとてつもなく混乱していた。

それもそのはず、俺は転生者であるが、ISの細かい知識までは理解していない・・・というよりも出来るはずがない。

何？あの分厚い本（参考書）を読んどけって？・・・出来るか！

「むむ・・・むむむむむ」

今、俺の頭の中では100人近くの小人が総動員されて授業内容を理解しようとしているのだが、

——あ、小人が一斉に血を吐いて倒れた！

ちょっとくらい、束さんの脳みそを分けて欲しいものである。

「ではここまでで質問のある人」

山田真耶先生の笑顔が、残忍なものに見える。

「おい、一夏、わかる？」

「ぜんぜん」

「織斑くん何かありますか？」

「「っ」」

山田先生が俺たちに尋ねてきた。

いや、これは不味い。

本音は物凄く学校辞めたいです、だが・・・そう言ったらそれはそれで地獄ではなく天国を見る（見に行く）ことが出来るだろう。

主に千冬の姉貴の鉄拳で、だ。

「わ、わか」

「わか？」

理解しようと俺の頭の中の小人たちを再び・・・。

・・・。

・・・。

あれ？小人が動かなく・・・。

小人死んだあああああああああ！！

「W A ☆ K K A ☆ R A ☆ N !」

「えーっとお兄さんのほうは・・・」

困ったような顔で一夏のほうを見る先生。

頼む！頼むぞ一夏！俺の脳内の小人たちの仇を・・・ではなく鉄拳制裁が嫌だから回避してくれ！

「え、えーつとお・・・なら、先生・・・」

「わからないところがあったら言ってくださいね？私は先生ですから」

うお、千冬の姉貴から凄まじい怒りを感じる。

平常心のように見えるけど、あれは絶対内心怒ってるよ・・・。

気まずそうに一夏は手を挙げ、それに笑顔で返す山田先生。

「ほとんど全部わかりませーん！」

「え・・・？全部ですか？」

「なあ、織もそうだろう？」

「今の段階でわからない人いますかー？」

山田先生、そういうの俺たちだけだから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前ら、入学前の参考書は読んだか？」

「「え？あの分厚いやつですか？」」

「そうだ、必読と書いてあっただろう？」



「もちろん！ストレス発散に破り捨てましッ——ぐふッ！！？」

「馬鹿かお前は・・・おい、織斑（兄）お前は？」

凄まじい衝撃だったぞ？

出席簿が武器になるなんて、こんな話聞いてない！！

罨だ！——これは罨だ！

じゃなくて・・・。

「間違って捨てm——うああッ！！？」

うん、やっぱりいい音だ。

「二人とも、後で再発行してやるから、一週間以内に覚えろ。いいな？」

「いやッ！一週間であの厚さはッ！」

「いや、俺を舐めるなよ、千冬の姉貴！こんなもの！卒業するまでかかるぞ！」

「やれといっている」

キラーン☆と効果音を付けたくらい、その眼は光った。

いやはや、姉って恐ろしい。

「無r——ぐぼッ!?!?」

そして再び否定しようとした俺は殴られる。

「織、千冬姉には逆らわないほうが・・・」

「俺は、退かぬ!媚びぬ!省みぬ!ってぐぼふッ!?!?」

「駄目だこいつ、早くなんとかしないと・・・」



休み時間っていいよね?

面倒な授業のことも忘れて、ゆっくり出来る時間だし。

俺の頭の中の小人も休ませて上げられるし。

でも、ここでは俺たちに休みはない。

「ねえ、聞いてますの?」

横には金髪美人がいて、しつこく話しかけてきている。

そして周りには野次馬の美少女たち。

ワォオ☆何その楽園!とか思った奴、頼むから変わってくれ。

「聞いてますの!?!?」

無視、無視っと。

って・・・これ以上は不味い。

向こうの怒りが結構たまってるぞ・・・。

「ふむ、君誰？」

「なッまあまあ、その反応は何ですか？このわたくしに話k」

「僕は織斑織っていうんだけど、君は？」

ふむ、猫かぶりもいいところだよ、俺。

「なるほど、正しい判断ですわ！心してお聞きなさい！私の名前はセシリア・オルコット！イギリスの代表候補生ですわ！」

「ふむ、セチリア・オルコッツか」

「セシリア！セシリア・オルコット！ですわ！わざとですよ！？」

「失礼、かみました」

「わざとですよ？」

「かみまみた」

「わざとじゃないっ！？」

おい、一夏。

いつの間に会話に入ってきた？

しかもそのツツコミ！凄いなお前！

「垣間見た」

「俺の才能の一端をか！？」

「本気で見ちまったじゃねえか！この野郎！！！」

すっげええ！コイツ凄い！流石主人公！！

いやいやいや！こっちの世界にはあの作品ないからな！？

よし、話を戻してやらねば・・・セシリアが口を開いてポカーン  
としているではないか。

「だ、代表候補生ってなんだ？」

一夏が俺より先に会話に入る。

あ、俺意外の野次馬とか全員がずっこけた。

「日本の男性というのは皆これほど知識に乏しいものなのですか！  
？」

「？」

話の腰を斧で寸断した感じだよ、お前！

ここは素晴らしき弟（笑）が助けてやらないと。

（笑） ってなんだよ。

「では教えてさしあげm」

「おい、雑種！この我が直々<sup>オレ</sup>に教えてやらんこともないぞ？」

「おお、織！頼む！！」

「なっ・・・！」

スマン、セシリア・・・だってお前の話長いもん。

「国の代表の候補・・・言い換えるとオリンピック出場選手候補のようなものだ。わかったか？雑種？」

「お、おう・・・凄いなだな」

「そうですわ！エリート中のエリートですわ！」

「エリングギ中のエリングギだよ！一夏！」

「貴方絶対からかってますわね！？」

ちなみに言っておくけど、俺、IS経験一夏と同じだからな？

もし勝負になるようなことがあったら、この眼と身体能力があつて

も厳しいんじゃない？

からかうのはやめておこう。

ネタバレだけど、コイツ結構な努力家で俺嫌いじゃないし……。

「んで、確か入試で教官を倒したんだったよな？」

「そうですわ！教官を倒したのはこの私一人ですもの！覚えられているのも無理はn」

「あれ？俺も倒したぞ、教官。しかも織だって」

ここで空気の読めないやつ発動。

俺はこの眼と身体能力（とはいっても素質を貰っただけだからここまで鍛えるのに苦労したんだぞ？）で教官の武器を全て破壊してやった。

やはり肉弾戦のほうが簡単でいいや。

斬り合いならIS相手でも自信あるし。

「な、何ですって！！？あ、貴方も教官を！？私一人だけと聞いていましたのに！？」

「女の中でってオチじゃあッぐふッ！！？」

一夏をとりあえず黙らせて……。

「そこまで驚くことじゃないだろ？」

「これが驚かずにいられますか!！」

ち、面倒くさいなあ・・・。

顔が近づけられるのは苦手なんだ。

「HEY落ち着けハニー!その話をここでするのは野暮だぜ!と俺は俺は落ち着くよう促してみたり!」

「~~~~ッ!何か周りに勘違いされてしまってるじゃありませんか!!?!」

ふむ、野次馬に誤解を招いてセシリアが目立ってるけど・・・どうしよ。

略。

ここで運よくチャイムの音が鳴り響く。

音を略すな!

しかしナイスタイミングである。

「チャイム?」

「COOLタイミングだぜ!良かったなあ旦那!」

「織、お前大丈夫か?」

うん、実に結構無茶してるよ？俺。

「お、先生がきたぞ」

「くっ！この話はまた後でしますわ！」

やっべ、最初から印象悪いなあ・・・。

よし、ならこの学園で一夏のフラグを片っ端から・・・今まで無理だったのに出来るわけないよなー・・・。

一人だけフラグいじれたよ？けど、出番まだまだだし、ここではあえて言わないで置こう。

とりあえず、部屋ってどうなるんだろ？



ハーレム、って言葉を誰かが言った。

俺の顔ってさ？式似だから、女子からみても悪くはないんだけど・・・。

あんまり今、嬉しくない。

「さ、先が思いやられる・・・」

「モグモグ・・・（ゴクリ！）ふみゅ、確かにこれは不味いよなあ



（飯はうまいぞ？）」

「まるで見世物みたいだ。そう思わないか？織」

「動物園のパンダの気持ちがわかるぞ、あ、俺動物園行ったことないや！」

「そーいや、お前・・・学校の遠足とかでも動物園だけは避けたよな」

そりゃそうじゃ！だって俺の眼の性質上、死が見えるからな。

可愛い動物たちの死なんか見に行っても笑えないだろ？

すまん、未来の俺の彼女。

動物園デートは一生無理だろう。

「っと寮についた・・・」

「おい、一夏！部屋割り表はどうなっている？」

「えーっっつと片方が空き部屋で片方が誰かと同じみたいだ」

「ってこれ、相手のほうも俺たちも名前書いてないじゃん！1025室は、誰かと同じ部屋はお前ね、はい決定！」

「おい！織！いくらお前が人見たくないからって！それはないだろ！！？ってここは男二人の部屋がいいだろ！？」

ふむ、これはこれはまたまたおかしいですな。

男二人一緒の部屋、というのが寮としては普通なのに俺と一夏を分離するのは流石におかしい。

いや、男二人だと悪巧みすると思ったのか？または……。

え？俺？

俺はそんな変態なことしないよ。

一夏を結果としてそうなるようにおちよくりまくるだけだけど。

俺も一人はさびしいけど、お前の未来の嫁のために我慢我慢。

「さびしいならお前がこの部屋に行け！！」

心の一部が読まれた！？

「そ、そんな！？一夏は俺に不登校になれというのか！？」

「いや、どうしたらそうなるんだ……」

地味に本気でいやな俺。

「……兄貴のクセに……譲りもしないのか……」

「なッ……それ言うのはズルイだろ！？このニート体質！」

「うるせえ！ここばかりは譲れないんだよ！Mr. 鈍感！」

俺は箒の裸に興味・・・あるっちゃあるかな？俺も男だし。

でもそれが許されるのはコイツだけだろうよ。

「こういう時は早いもの勝ちだ！！」

とりあえず別の部屋に向かって、俺は並々ならぬスピードで走っていった。



「・・・で、何でこの部屋についてる電話に電話できるの！？ってか何で知ってるの！？」

部屋の電話を取りながら、俺は呆れたようにため息をつく。

『いやいやーそりゃ束さん、天才だからさー。シツキーのや箒ちゃんの部屋ぐらい、全部把握してるよー！最近、箒ちゃんの胸の成長も凄いかからねーふっふっふ・・・何気なくシツキーもロックオンだよー♪』

「な、何だと！？プライバシーもクソもないじゃん！クソッ！！多分カメラとか仕込んだだろ！？どこに置いてんだ！？」

探してみるが、カメラらしきものは見つからない。

そりゃそうだ、だって束さんだよ？天才だよ？

『一つじゃないしそう簡単には見つからないってゝだって束さん、少し本気だしちゃったしゝ。シツキーも素直じゃないねゝ。シツキー、素直になっちゃいなよゝ』

「素直になるよゝゝ僕。束さんを愛してる！って言うかああああああああああああああ！ふざけるなあああああ！！」

『うんうん！シツキーは面白いよ！』

「え！？そんだけ！？僕のプライバシー侵害する理由そんだけ！？」  
相変わらずこの人ひどい！

まあおそらく、向こうの一夏は箒とのイベントで箒のバスタオル姿を拝んでいるのだろうが、こっちはそんな甘いものはない。

義理だけど兄弟なのにそこらへんの采配ひどくない？

『まあ、まあ、落ち着きなよ』

「これが落ち着いていられるかあ！！」

『それはそうと、シツキーの専用機をそっちに送りつけたよー』

「！！」

おい、それが本題か。

・・・というより、まさか束さんが強引に部屋を用意したんじゃないか・・・

ヒヤッホー！束さん、愛してる！というのはまあ冗談だけだな。

『いいよいいよー！もつと褒めて褒めてー』

「って心の声までわかるのかよ！！？」

それよりも。

「性能は？」

『ISの中では攻撃力最悪レベルだね』

「いや、俺に攻撃性能はいらない。それよりも欲しいのは」

『超高速の移動、でしょー？いやはや、この天才束さん！ひそかに作ってた紅椿よりも速さだけなら上に行くやつを作っちゃったんだよー！』

「えげつねえスピードじゃねえか？それ・・・」

『スピードに関してだけなら最高の機体だけど、攻撃性能と防御性能は普通過ぎるよ』

それでも普通なのか。

天才凄い。

俺が束さんに言ったことは一つ。

『相手に俺が一撃喰らわせられれば、攻撃性能など関係ない』というようなことだ。

この天才はそれに答えてくれたのだろう。

「攻撃を避けるか防ぐかは俺次第ってことか？」

『そうなるねー』

へえ、それだと結構面白いパワーバランスになるなあ。

「で、色は？」

気になったためにきいてみた。

いや、だってさ……。

『うん、白と黒の機体だよー！』

まさか、神様も関わっちゃいない……よな？

わかる人こそわかる衝撃である。

「じゃあ、その機体の名前、俺が決めてもいいかな？」

『えー』

「えー、じゃない」

『しょうがないなあ、シッキーは〜』

「はは、じゃあ言わせて貰おう」

一息つき、言う。

起源と、もう一つ存在を。

「俺の名じゃない、『虚無<sup>シキ</sup>』だ」

その名は、最近俺が自覚し始めた存在だ。



翌朝。

ふむ、俺、シリアスになってしまったな。

基本こんな感じなんだけどなあ。

「それにしても、東さん、俺の母だよ」

「ま、また連絡とったのか？ 仲いいな、織」

横には俺が知る中でもっとも鈍感な主人公がいる。

今は朝食をとるために食堂で飯をゲットし、席を探しているのだが・

・・。

「それにしても、俺の母ってどういう意味？」

「・・・俺の母↓我が母↓我がママ↓ワガママ↓ワガママ!!」

「・・・・・・・・」

「ワガママ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

くっそう、朝からすべった。

「固まるな! どうせ箒のバスタオル姿でもお前は拝んだんだろーが  
!」

「どうしてわかるんだお前!!? ま、まさか見てたのか!??」

「悪い、勘だ」

「うわあああああああ! 誘導尋問!!?」

まあ、おかげで箒さん、恥ずかしがってなさる。

そんな箒の横に一夏が座り、その横に俺が座る。

「おいおい、箒どうしたんだ」

「名前で呼ぶな！」



「あ、ああ、スマン」

「あーツンツンしてるねえ・・・」

「織斑君、隣いいかな？」

「・・・、いいよ」

出た！三人組み！

一人なんかピカチュウみたいな服きとるし・・・。

のほほんさんこと布仏本音は、見ているだけで心が癒される。

！

今尻尾みたいなの動かなかった！？

「うおっ、織斑君ってもの凄い食べるんだー」

「男の子だね」

「横の鈍感よりは燃費がいいぞ？」

「ってか弟君のほうって、出来るだけ人と顔合わせようもしないよねー。照れ屋さんのの？」

「・・・ま、まあそんなところだ。俺は違うが、ハーレムをハーレムと思わないやつこそハーレム。そう思うだろ？」

「「ほうほう・・・一理ある、かも・・・」」

コイツら、仲良くなれそうだ。

「何吹き込んでんだよ、織」

「ほら、コイツが女の敵。覚えた？」

「「そ、そうなの？」」

「・・・ってよく朝飯それだけで足りるよな」

ぬ、一夏め・・・話題変えやがった。

「わ、わたしたちは・・・ねえ？」

「うん」

「お菓子、よく食べるし！」

うお！？

またのほほんさんの服の尻尾が！？耳も！！？

す、すげえよのほほんさん！

「私は先に行くぞ、一夏」

「うっわー怒ってるよ」

さっさとトレイを戻して食堂から出て行く筈。

一夏、お前にはほんと呆れたよ。

「ねえねえ、織斑君たちと篠ノ之さんって仲いいの？」

「幼馴染という間柄らしいぞ？」

「お前もだろ、織」

パンパン、と手を鳴らす音が聞こえた。

げ、千冬の姉貴！

「いつまで食べてるー？朝食は迅速に効率よく取れ！私は一年の寮長だ！遅刻したらグラウンド十週させるぞ！」

「まあ、俺はそれぐらいどうってことないんだけどな！」

「お前に限っては千週だ！」

「すいません、ちゃんと食べます」



「ふう、相変わらず姉貴は怖い怖い☆」

「そんなお前を、俺は素直に尊敬するぜ・・・」

「おい、そこ！うるさいぞ！」

千冬の姉貴の言葉に、俺たちは口を閉じる。

あの話があるな。

「再来週に行われるクラス代表戦の出場者を決める！」

その後に、生徒会に関われるとか？色々姉貴は説明していく。

「まあ、クラス長と考えてもらっていいだろう。自薦他薦は問わない誰かいらないか？」

「はい！！！」

俺はここで手を挙げる。

「・・・織斑」

あれ？何か間があったぞ？

まあいいや（笑）

「一夏君を推薦します！」

「なッ！？なら！俺は織を推薦します！」

なッ・・・馬鹿な！？

ま、不味い。

つて頭を抑えるなよ千冬の姉貴。

「じゃあ織斑君二人を推薦します！」

「私もー！」

「じゃあ私もー！」

「私も！」

「織斑君二人を推薦しまーす！」

畜生ウ。

「おい、他に意見はないのか？このままだと、この兄弟の予選になるぞ？」

「「おい待て！それは納得がいかな」

「納得がいきませんわ！」

「良いね、そういうの、俺は好きだ」

セシリアが机を叩きつけながら立ち上がる。

「男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえと！？」

ふむ、何かイラッとする発言だよなあ・・・。

「全く、喰いついてくるのはいいけど、相手を選べよ？男は皆ズルイなんてお前の幻想なんだからさー？」

「な、何ですの！？」

「あーあー、人の価値観にアレコレ言う気はないけど、歪んだ価値観だよな。お前、最高にダサイよ」

「ッ・・・！だ、大体！文化としても後進的な国に暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で！」

我ながら少し感情的になってしまった。

いつものCOOLな俺に戻ろう。

と、そこで一夏は言う。

「イギリスだって、たいしたお国自慢ないだろ。世界一不味い料理何年覇者だよ？」

コイツ、怒るトコずれてる。

いや、確かに俺も自分の国否定したら腹立つけどさ？

「まあ、不味いからな・・・というか食文化がないって言ったほうがいいか？」

「そうなのか？」

「ああ。アメリカとかイギリスって、料理とかであんま名前でない  
だろ？フランスとかイタリアとかはよく出るけど」

「ああー、なるほどな」

完全にセシリア無視。

やるな、こいつ。

「美味しい料理はたくさんありますわ！」

「世界的には評価されてないけどな」

「貴方たち、私の祖国を侮辱しますの！？」

・・・式が鮮花を好いている理由が少しわかった。

何か面倒くさい。

よし、一夏に尋ねよう。

セシリアに聞こえないようにな。

「ふむ、祖先から続いてる血のつながりは？」

「血統」

「血液中に含まれている糖分の種類は？」

「血糖」

「じゃあ、互いの尊厳をかけて闘うことは？」

と、ここでセシリアが腕を振りかざし、俺たちを指差した。

「決闘ですわ！」

（パーフェクト！）

「おーいいぜ！四の五の言うよりわかりやすい」

地味に感動している俺と笑いをこらえる周囲。

いやーいいタイミングだよ。

だけど、一夏の野郎、流れを理解していない。

流石鈍感。

ってちょっと待て。

「えーっと・・・その決闘、俺も？」

「当然ですわ！」

「なッマジかあ！？」

「・・・はあ」



一夏・・・テメエ、一発殴らせろ！

「わざと負けたら二人とも、私の奴隷にしますわよ？」

「じゃあお前が負けたら一夏専属のメイドな？」

流石に、裸エプロンはどこぞのマイナスではないので言えない。

しかもこの場所でそれを言うと、下手するとセクハラになってしま  
う。

「なッ！」

地味に驚いているセシリアを前に、一夏は本気でうろたえていた。

なんじゃこの鈍感野郎・・・・・・・・。

「・・・お前は死ね！」

「なッ!？」

とりあえず罵声を浴びせた俺だった。

**あの金髪も結局はデレるんだよな？（後書き）**

工場長「感想、待っているぞ！（主に蒼崎から）」

## ながーい前座とようやく試合（前書き）

日刊ランキング一位！？感謝感激ありがとうございます！

処女作ですから、駄目出しもどんどんください！

戦闘シーン、今回少し入ってます！

うむ、戦闘シーン苦手なあ・・・。

今後の表現力の上達に期待してください！（笑）

## ながーい前座とようやく試合

専用機まだかなー。

そう思ってしまうのも当然。

俺は今日日本の量産型である打鉄を使って練習するか、模索している状態なのだ。

横にいる馬鹿には置いていかれる可能性も考えている。

「はぁ、専用機届かないかなー」

「え？ 織も？」

「なッ！？ 一夏さんだけじゃなく貴方にも専用機がくるのですの！？」

「ああーアイス食べたい！！」

「無視！！？」

ふむ、皆さんこんにちは。

織斑織です。

あれから一夏に専用機くる！などという話が千冬の姉貴から皆にさ  
れ、今のでかい声で俺の専用機もバレちゃった。

心の声を呟いちまった。

ビックリさせてやりたかったのに。

うわあ、なんて適当な説明。

「ところで、専用機持ちって凄いことなのか？ 織」

「お前の家の横の人のさらに横の人のおじいさんが鼻からうどんを食べるくらい凄いことだぞ！」

「意味わからねえ！ 凄いのか凄くないのかどっちだ！？」

「NONO！ それ以上説明したら、俺の頭がゲシュタルト崩壊おこす」

「どんな軟弱な頭なんだよ！？」

「専用機のことを聞いて安心しましたわ！ まあ、そうでなくては勝負にすらなりませんものね」

ふむ、コイツはデレるまで無視しようと思ったが……。

今敵対してるのに絡んでくるとはすげえよ。

余裕のあらわれかな？

よし、ここは……。

「俺の圧勝でな（ドヤア）」

「なッ！？それはありませんわ！貴方も、今まで私が倒してきた者のようにすぐ倒してさしあげますわよ？」

「どうして敵に説明したがるの！？何だコレ？どいつもこいつもツンデレしかいねー！ー！」

「つ、ツンデレ！？で、専用機というのは（くどくどくど）」

「ど、どうしたんだよ？織」

「いやさ？ヤンデレよりはマシだよ？でも結局コイツもツンデレじゃん！」

「ど、どういうことだよ？」

「一夏死ね！ってことだと思うよ」

そこで、セシリアの一人言は終わせうめいった。

「世界にわずか467機？少ないな」

「だからこの人はエリングギ中のエリングギとうるさいんだろうよ」

「ISのコアは全て篠ノ之束博士によって作られたコアはISの中心に使われていて、その技術は一切開示されていないの。他の研究機関が頑張ってもその技術はわかっていないみたい」

「ありがとう、モブ。お前のその役割を愛してる」

突然説明に現れたモブキャラを置きつつ、俺は頭の中で情報を整理する。

「あ、あのー先生、もしかして篠ノ之さんって篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

うんうん、質問なさる理由がもつともだが、女子よ、目の前のその千冬先生も束さんの友達だぞ？

「ああ、そうだ、篠ノ之はアイツの妹だ」

「「「えええええー！？」」「」」

性格的にはどっちが妹かわからないがな・・・。

まあ、他人に対してはあの人凄いな・・・。

だから人が好きでも人を見るのが嫌いな俺に興味を持ったんだろう。

「そして、そこの馬鹿はアイツとかなり仲がいいようだ。説明はここから聞け」

「説明面倒だからって僕にふるな！このゴリラ姉k——ぶぽるぐッ！！？」

ドゴーン☆と俺の体は床に転がる。

痛い・・・凄まじく痛い・・・。

と、いうよりいつのまにか箒さん質問攻め。

そりゃそうだ。

「あの人は関係ない！・・・私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

シーン・・・何このシリアスな空気・・・。

まあ、理由はわかるさ。

あの人が凄いから、ずっと振り回されて生きてきたみたいなんだし・・・。

「山田先生、授業をお願いします」

千冬の姉貴！怖い！怖いよその声！

っていちいち説明に立ち歩くエリート！！？

それは笑えるな。

「IS、インフィニット・ストラトスは――」

授業って眠いなあ・・・。

「ふああ~~~~ッ・・・」

「おい、一番前の席でそれはないだろ、織」



「はあ、学校つぶれろ」

「何かとんでもない事言い出しちゃった!？」

うーん、だってわからないんだもん。

「さっぱりわからない・・・」

「zzzzzz・・・」

「いや、寝るの早いだろ!？」

「ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

質問するように女子の誰かが尋ねる。

「先生ー、パートナーって彼氏彼女のような感じですか？」

ああ、このくだりか。

想像以上に眠い・・・。

「そ、それはその・・・どうでしょう？私には経験がないのでわかりませんが・・・そのへんーっと」

まあ、あの感じは他のものを殺した時より奇妙だったからなあ・・・。

「なあ、これって女子高ノリってやつだよな？」

一夏の困った様子を無視する。

「じゃあ、俺と付き合ってください♪」

「えッ！？ えええーッ！！？ そそそれは私は教師で織斑君は生徒だから・・・」

「あっはっはっは、先生ウブだなあ」

「宿題倍にしますよ？」

「す、すいません！」



ふむ、長い前座だった・・・。

だけどまだ続くんだよな、この前座が・・・。

休み時間。

「箒、飯食いにいこうぜ！」

俺も誘われた・・・断ったけど無理でした。

一夏・・・もうここあたりで十分殺意がわいてきた。

女子の気持ちをわかれよ、お前。

俺もわからんけどな。

ちなみにこの作品、OVAネタもいつかやるぜ？

まあ、セシリアの黒魔術もみたいな・・・。

「・・・」

「篠ノ之さん、飯くいにいこうぜ！織もいるし、他に誰か一緒にどうだ？」

「はい！はいはい！」

うお！？のほほんさん！！？

「行くよ！ちょっと待って〜」

「お弁当作ってきてるけど、いきまゝす！」

うおおい、一夏の力って偉大だな・・・。

俺？俺は何か怖がられてます。

話しかけられても基本目をそらしてるからな。

「そうこなくっちゃ！クラスメイト同士、やっぱり仲良くしないと  
な」

「お前、それは箒と二人にしとけよ」

「お前も、もっと人に慣れなくちゃ駄目だろ？ 兄として協力させろよ」

コイツ・・・、わかってない。

「な、お前もそう思うだろ？」

「私はいい・・・」

「ほら！ この子だって嫌がってるじゃないか！」

「俺は不審者か何かかよ！！？？」

「そうだろ？」

「・・・」

無視しやがった！！

「そう言うなよ」

箒の腕を掴む一夏。

「ほら、立てたて」

「・・・どう見ても不審者だ！ くそう！ 束さん！ アンタの妹がさらわれるよ！」

「そのノリやめろおおおお！」

「おい、私はいかないと・・・」

「何だよ、歩きたくないのか？おぶってやろうか？」

「おい、セクハラもいいとこだぞ・・・って一夏！前！」

「なッ~~~~離せ！！」

強制的に立たされた掃除用具さんが照れ隠しに一夏にタツクル。

「うああッ！！？」

照れ隠しにしては強烈だな。

一夏があまりにも簡単に突き飛ばされたので、箒さん、驚いてる。

やれやれ、俺が助けてやらないとな。

「言わんこっちゃない。そうだな、一夏曰く、抱かせろこの野郎！  
だそうだ」

「ツツツ~~~~！！」

俺には拳！？

「うおっと！？」

まあ、かわすけどな。

「いやはや、最近のツンデレってスペック高いな。いや、お前はボコデレか」

「何を言っている？」

「好きな相手をついついボコってしま——うおあッ!? あつぶね」

「すすす好きな相手だと!?!」

「その反応じゃあ否定は無理だよな。ハッハッハッハ!!」

そんな俺たちの暴力的（俺は避けてるだけ）なやりとりを見て、ススーと退いていく女子三人組。

笑ってる間に攻撃三回は避けてるからな？

千冬の姉貴よりは楽だ。

「箒!」

「・・・なんだ、いいたいことがあるのか？私を名前で呼ぶなど・・・」

「箒! いいからこい!」

掃除用具の手を握ってさっさと食堂に向かう一夏。

あれ？俺置いてけぼり？

誘っておいて放置の上、女を口説くの？

これはひどい。

よし、

「抹殺決定」



「幼馴染で同門なんだ。これくらいの世話、やかせろ」

「あの、その、ありが」

「いーちーいーかあああああああ!!」

「うおおあッ!!?」

箒さんのデレシーンの隙をついて一夏の背中にとび蹴りをお見舞いさせた。

食器の乗ったトレイをとる直前だから、被害は一夏だけだぜ?

一夏の体が転がっていくのが見える。

やべ、やりすぎた。

箒さんがつめよってくる。

「なッ・・・織!? お前、何を!」

「いやゝ兄弟間のコミュニケーション♪」

「その割には一夏が死に掛けてるぞ!？」

「いやいやゝまあ落ち着けよ箒ゝほらほら織さん、おちゃめなんだって」

「お前はどんどん私の姉上に近づいていつてるな!!？」

いや、それはないだろうよ。

とりあえず、何気なく一夏の頼んでいた飯ののったトレイを受け取り、歩いて、列から出て行く。

「……ぐ……織……お前……俺、何も……してな……」

「ほう、心あたりがないのか？誘っておいて放置とはいいいご身分だ……。覚悟はいいな？」

「ぐ、ごめん！それおごりにするから！」

「よろしい」

とりあえずもう一度自分の飯をとりに行く一夏に、席に座り、淡々と飯を食い始める俺。

箒さんは一夏を待つようにゆっくり食べているが……。

「……素直に一夏にI S教えてやったらどうだよ？」



「何故お前が一夏のことを？」

「いやー、俺も教えてくんない？」

「お前は私の姉上に聞けば早いだろう」

「なるほどな、一夏と二人っきりになりたいのか」

「なッ！？ ななな何を言っている！？」

うっわー、あからさまな反応。

箒は赤くなってもじもしだす。

それだけならかわいいのになあ・・・。

「待たせたな」

そこで鈍感男入場。

「なあ、箒・・・ISについて、教えてくれないか？」

「知らん。あんなくだらない挑発に乗るのが悪いんだ」

「全くだぜ、なあ、箒？」

「お前も乗っていただろうが！」

「そ、そんなわけない」

「……」

おい、呆れるな二人とも！

そこに、初対面の少しおとなしげな少女が歩いてこちらにきた。

「ねえ、君たちって噂の子でしょ？」

「ふっふっふ、バレてしまったなら仕方がない！ここで死んでもら——ぐふうッ」

不意を……クソ……掃除用具め。

「代表候補生の子と勝負するって聞いたんだけど、でも君たち、素人だよね？」

「コイツは化け物みたいだけどな」

「お前はそれの兄だからな？」

「私が教えてあげよっか？ISについて」

う、……迷うな。

「結構です。私が教えることになっておりますので」

箒さん！？

ま、まさか俺が特に見慣れない人を見るのが嫌いな（まあ、一夏や千冬曰く勝手極めた人見知り）を知っていて！！？

め、女神!?

「え?」

一夏、お前は黙ってろ!

「貴方も一年でしょ? 私三年生。私のほうが上手く教えられると思うな」

「私は、篠ノ之東の妹ですから・・・」

「ッ」

「ですので結構です」

訂正。

コイツ、一夏のことしか見えてない。

「・・・ツンデレの防衛本能ってやつか・・・」

「なあ、織も教えてもらえよ。織もISに関しては同じだろ?」

「ぐ・・・お前、どうしてこうなったかの空気ぐらい読め!!」



「・・・というわけでどうして剣道? ツ・・・」

ここは剣道場。

俺たち三人は全員剣道着を着て、防具をつけ、剣道をしている。

どうして？と言ったが、理由は承知している俺。

「おっと、流石に速い」

「お前の動きもな」

竹刀で箒の竹刀を受け流して、極力竹刀を構えずに避けていく。

「ふッ！はああッ！！！」

「ッ」

後に跳び、鋭い胴への一撃をかわす。

しかし、これで止まるほど簡単な相手じゃない。

「まだだ！！」

「ッ！？」

まず、一つ言っておこう。

素人からすれば、剣道をやっている人物の竹刀は見えないくらい速い。

それだからこそ、この反応出来るか否か反射神経は、ISに乗った

ときも影響いてくるだろう。

「ッ、ちッ！」

防具のせいで動きづらい。

箒の攻撃も止まらない。

だが、俺も剣道とは別だが、鍛錬を続けてきた。

「そこだ！」

「!!」

一瞬を見極め、隙をつく。

眼に頼りはしない。

正々堂々の勝負なのだから。

スパーンッ!と綺麗な胴が入る。

「次は一夏だ」

「お、おす・・・」

そしてしばらくの打ち合いを俺は眺める。

ふむ、すごい不機嫌そうな箒さん。

一夏が箒に押され、しりもちをつく。

ちなみに面はつけてない。

「うああッ！？ ぜえ、ぜえ、ぜえ・・・」

「どういうことだ！？ どうしてそこまで弱くなっている！？」

流石IS学園、剣道場も広いな。

「織！これはどういうことだ！！」

「一夏は女をたぶらかして回ってたからな」

ちなみに、俺は普通に箒と打ち合ったりした。

それにしても、箒の体力も凄いな。

「ッ！鍛えなおす！IS以前の問題だ」

「おい！織！何嘘吹き込んでんだ！？」

「嘘じゃないだろ？なあ、箒？」

「ああ、全くもってな」

流石箒さん、理解が早い。

よし、俺も。

俺と箒は竹刀を構え、一夏を見据える。

「「さて、続けるとしよう（するか）」」

「なッ・・・」

いつの間にか、趣旨が変わってしまっていた。



そして・・・。

日は経ち、ようやく長い長い前座は終了。

俺は今、クラス対抗戦の予選初日を迎え、アリーナの中でISの到着を待っていた。

予選について説明しておこう。

今日、最初に俺VSセシリア。

別の日の二戦目でセシリアVS一夏。

さらに別の日、三戦目で俺VS一夏。

総当り戦だ。

出来れば、二日目あたりが初戦であって欲しかったのだが・・・。

ああ、これは本気で負けるかもな。

ちなみに、一夏は別のアリーナでファーストシフトを終わらせに、そして特別指導を受けに行っている。

「・・・ようやく、だよなあ・・・」

ちなみに、横には箒がいる。

一応、俺の応援にきてくれたのだろう。

「織、勝算はあるのか？」

「ある、といたいところだけど、全くもってないな」

「やっぱり、そうなのか・・・」

「まあ、どうにかしてみせるさ」

相性的には悪いかもな。

柄にもなくネガティブな俺の耳に、山田先生の声がスピーカーを通して聞こえてきた。

『織斑君！ISが届きました！！』

「！」

待ってました！といいそうになった。



そこに、千冬の姉貴の声が聞こえてくる。

『アリーナを使える時間も限られているから、ぶっつけ本番でモノにしろ』

「相変わらず無茶言うな」

『お前なら、出来るだろ?』

「当然!」

初期設定だけで挑むのは一夏じゃああるまいし、無茶だと思う。

でも、悪くない。

『ISを出すぞ!』

「!」

轟音とともに大きな扉が開き、その中から黒と白の輝きを放つ装甲が見えた。

堂々としていて、それでいて俊敏そうな感じ。

「こ、これが・・・」

見た目で簡単に説明するなら、白式の色違い。

だが、大きさは白式よりも一回り小さく、ベースの色は黒で白い線

が多数走っている。

決して交わらない白と黒。

それが示すのは

陰と陽。

善と悪。

式と織。

そして、この機体はその境界線の象徴。

「・・・『虚無<sup>シキ</sup>』・・・」

ああ、この機体はまさに俺専用なんだな、と思ってしまう。

なぜかはわからない。

惹かれた、とでも言っておこう。

「最ッ高」

『・・・織斑、時間がない。早速そのISに乗れ』

「ああ、」

ISに触れた瞬間、親近感のようなものを感じた。

また、俺自身のようにも感じ取れた。

不思議だ。

(・・・)

もう感動しか、ない。

『背中を預けるように、後はシステムが最適化する』

「不思議なもんだな、この感覚」

ISが全身を守るように、鎧のように俺の一部となっていく。

奇妙な感覚だ。

勝負事には真剣になってしまうのも、違和感しかない。

まあ、悪いことではないからいいか。

「なるほど、パートナー、ね」

目の前にいくつか透明度のあるウィンドウが開き、相手の情報が表示される。

「ブルー・ティアーズ・・・か」

弾に反応出来れば勝機はあるかもしれないけどな・・・。

『織斑、気分は悪くないか?』

「逆だよ、千冬の姉貴！」

『そうか』

もう頭の中には戦闘のことしかない。

それほど、俺もISで闘うことを楽しみにしていたのかもしれない。

東さんの電話で機体の名前を聞いた時からだろう。

「じゃあ、箒、一夏によろしくな」

「ああ！応援しているぞ！勝ってこい！」

まったく、勝って来いは期待しすぎだ。

でも、期待ぐらいはこたえてやるか。

ニヤリと笑い、俺は静かにISの機体ごと体を宙に浮かばせる。

「ああ、勝ってやるさ！」

滑走路に沿って飛び、飛行機のようにアリーナのグラウンドへ飛び出した。

かなりの高度に一瞬怯んだが、重力に引っ張られて落ちることはない。

慣れないスピード、感覚なのに、不安はなかった。

空中で待機していたセシリアと向かいあう。

「最後のチャンスを上げますわ」

「ハハッ、どんな？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは確実……。今ここで謝ると  
いうのなら、許してあげないこともなくってよ？」

金色の髪が風で揺れる。

俺は腕の装甲に埋め込まれていたナイフ型の武器を取り出し、構える。

——警戒、と目の前に現れたウインドウに表示された。

「悪いな！ チャンスも何も、どのみち勝つのは俺だ」

「そう、残念ですわ……。それなら」

セシリアが小さく笑った。

赤いウインドウが出現し、警告、と表示された。

——くるッ！！

「お別れですわね！！」

「ッ！！！！」

セシリアが撃つ瞬間に俺も反応して横に動いた。

しかし、所詮、動けただけ。

セシリアは瞬時に銃口をずらして、腕の装着されているライフルからレーザーを放った。

「ぐッ!!?」

直撃。

落下。

衝突。

目まぐるしい勢いで世界が何度も回転する。

「逃しませんわ!」

「ッ!!」

地面に叩きつけられた俺はすぐに起き上がり、立て続けに撃たれるレーザーを跳んだりしながらかわしていく。

『虚無<sup>シキ</sup>』とうまく自分が噛み合っていない？

「くッ!! 逆に性能が仇になってる!!」

もちろん、俺のISの武器に飛び道具はあまりない。

あるにはあるが、アレは銃のように撃つものではない。

「さあ、踊りなさい! わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで!」

何度も引き金を引くセシリア。

色鮮やかなレーザーは、俺がいたはずの地面を次々と砕いていく。

(不味い、当たらないのは地面を駆け回ってるだけだからだ。このままじゃ相手に攻撃できずにやられる!)

「く、ちょこまかと!」

と、そこで目の前の地面にレーザーが直撃した。

爆風でバランスが崩れる。

「そこですわ!」

地面を駆け回ると、空を飛ぶのは全然違う。

自分の身体能力が全くいかせていないくらい、慣れないのだ。

しかし、飛ばなければ闘えない。

「まだだッ!!」

ISの力だけで空に飛び上がり、その勢いでセシリアのほうに向かう。

「ナイフ!? わたくしも、舐められたものですわ!!」

(レーザーだって殺せるはず! 見極めろ!)

「次はどうかしら!!」

セシリアは先ほどよりも間隔をつめて連射する。

俺はそれの死を見る・・・が。

「いッ!!!!!!? (くそ! 上手く斬れない!!!)」

正確にレーザーを殺せず、レーザーに直撃する。

―おとされる!?

「そろそろフィナーレですわ!!」

一斉にセシリアのブルー・ティアーズから、ビット型の武器が四基分離する。

「まっずいな!」

直後、ビット型の武器から一斉にレーザーが放たれた。



降り注ぐはレーザーの雨。

避けきれない。

ジワジワと、確実に減っていくエネルギー。

圧倒的な差があることを思い知らされる。

(ツツ・・・)

こちらのエネルギー残量は300をきった。

「くそッ！こう一斉に放たれると対応出来な・・・！！」

レーザーの雨をしのぎながら、俺はセシリアの弱点を思い出す。

アイツは、この攻撃中は身動きが取れないんだっけ？

——なら、チャンスは今だ！

突っ込むことに迷いはない。

「さあ行こうか！！セシリア！！」

曖昧な空を飛ぶイメージ、を自分の脳に叩きつける。

付け焼刃だが、今はそれでかまわない。

セシリアに一直線に向かっていく。

「な!?!」

レーザーを喰らってしまうが、ある程度避けているので問題ない。

ビット型の武器は眼中にない。

あと二基、ミサイルの武器が残っている。

「なら、これでも喰らいなさい!」

ああ、上手いこと引き出せたな。

二つのミサイルが正面から俺に飛んでくる。

「お見通しだ!?!」

二つのミサイルをナイフで破壊し、セシリアのもとにたどり着く。

すでに剣なら届く距離。

そして。

もう少し間合いを詰めながらナイフを振りかぶった瞬間だった。

「!?!」

セシリアがフツと笑い、体から力を抜いた。

一瞬、諦めたのかと思ったが、違った。

「剣であれば、わたくしに攻撃が届いていたものですわ」

ゴッ！！と。

俺の背中を一斉に四本のレーザーが襲った。

「かッ！！！！！！！！？」

衝撃で重力に勝てなくなった。

体勢を必死に立て直すが、セシリアからはかなり遠ざかっていく。

落下は、止まらない。

「！」

そんな俺に対し、セシリアはサツと後に下がり、レーザーライフルを構えた。

「今度こそ、おしまいですわね！」

エネルギー残量も残りわずか。

(ま、不味い!!)

引き金が引かれる。

その、コンマ数秒前に、目の前にウインドウが現れ・・・。

(!)

レーザーが、俺に直撃した。

## ながーい前座とようやく試合（後書き）

感想にあったので、主人公の嫌といってることを補足説明しときます。

主人公が本気で嫌なこと、もの。

『人が本当に密集している場所』、『見慣れない人の死の線』（奇妙な感覚が見慣れてしまっている人なら我慢できる）が見たくない。

なので主人公は人と話していても特定の人物を除いて平気で目をそらしています。

目立つことに関してはすでに開き直っている、と解釈していただければ幸いですでしょうか？

その他の嫌、と言ってることは基本的に面倒くさがってるだけです。

ちなみに、試合の時は試合に集中してるため、平気。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2969ba/>

---

直死の魔眼・ストラトス

2012年1月9日20時45分発行